

マスコミが事件をつくった

——「イエスの方舟事件」の報道をめぐって——

渡 辺 良 智

一 はじめに

アメリカの歴史学者D・ブーアスティンはその著書『幻影の時代』のなかでつぎのように述べている。

かつてニュースを作る責任は神、あるいは悪魔のものであった。しかし、過去百年の間に事情はまったく一変した。「成功した記者とは、たとえ地震や暗殺や内乱がなくても、ニュースを見つけ出すことができる人間のことである。もしもニュースを見つけ出すことができなければ、ニュースを作り出さなければならぬ。」

現代のマスコミは定期的にニュースを報道せざるをえない。事件が発生するのを待っているわけにはいかないのである。ニュースになる事件が生じないならば、事件を発生させるのである。彼はこれを疑似イベントと呼んでいる。疑似イベントは発生日時や場所は予告できる。その内容は生じてみなければわからないが、報道につごうのよいものである。現代のマスコミの報道には、記者会見、有力政治家のインタビュー、討論会、大規模建造物の完成式典、スポーツ競技といった疑似イベントが満ちあふれている。ニュースの取材は、ニュースの製造へと変化したのである。

本稿において検討するのは、マス・メディアのつくりだすこのような疑似イベントではなく、マス・メディアの報道が、当事者以外の人々には大して関わりのない出来事を、重大な事件としてしまうケースである。マスコミが大々的に報道したことによって、ある出来事が、事件化、社会問題化した事例である。

「イエスの方舟事件」と呼ばれたその出来事は、二十年ほど前に起きている。この事件について比較的抑えた報道をしていた朝日新聞の記事で、「事件」の概要を追ってみよう。

八〇年二月二十六日夕刊に「イエスの方舟事件」の第一報が載った。見出しと主要な内容を取り上げてみる。

「イエスの方舟」騒動／女性10人ナゾの失跡／教祖も消え、不安の家族

「イエスの方舟」という宗教団体の若い女性信者十人が、長期間行方不明になっている。ナゾに包まれた教祖も一昨年姿をくらまして、これまた行方知れず。警視庁では不明者の行方を捜しているが、手がかりはなく、家族の不安は高まるばかりだ。

「イエスの方舟」の教祖は、千石イエスこと千石剛賢氏(56)で、信者たちは歯ぶらしやゴムひもの行商をしたり刃物とぎをしながら、布教活動が続けた。一時はバラックやテントづくりの「教会」内で男性四人を含む二十六人が集団生活をした。宗教法人の認可は受けていない。失跡者は、若い女性が圧倒的に多い。家出した直後は、家族に連絡があった。家族が「教会」を訪ねると、教祖は「行方は知らない。無関係だ」といていた。家族らは「娘に会わせてほしい」と要求し、警視庁も「方舟」周辺の捜査に乗り出したが、「イエスの方舟」側は「教会」内への立ち入りを拒否、対立しているうちに、七八年五月、全員が失跡してしまった。

さきの国会でも問題になり、国家公安委員長は搜索強化と答えたが、警視庁は家出人搜索を続けていく以外に手はないといっている。」

その後、「失跡者から手紙・写真／「イエスの方舟」の女性たち／警視庁、行方搜索に本腰」(三月六日)と、失跡

者の無事らしさが報じられた。

三月二〇日には「イエスの方舟」強制捜査へ／教祖に集団脅迫容疑、「女性10人どこに 強制捜査待つ家族」、同二八日には「失跡は自主行動」／「イエスの方舟」から本社に手紙」と当事者双方の動きが伝えられた。

ところが、七月三日夕刊では、突然、「教祖・千石らに逮捕状／「イエスの方舟」集団女性失跡事件／福岡のアジトを捜索／信者らホステス勤め」と女性たちがキャバレーのホステスをしながら福岡で集団生活を送っていたと衝撃的事実が報じられ、以下「千石と「イエスの方舟」幹部の素顔」「千石イエスと失跡中の女性10人」「早く娘たち帰して／許せぬ教祖のウソ」「証拠隠滅図る」と大々的に取り上げられた。

七月四日には「女性七人熱海で保護／千石は狭心症で入院」「逃避行の疲れもなく／薄化粧の女性たち／質問に終始うつむく」「血圧高い千石」「安心と怒りと……失跡女性の家族」「共同生活は楽しかった」と事態は急展開し、失跡者たちが姿を現わした。そして「なぜ起きた」「集団失跡」という記事では、人間関係の薄い現代社会で、原始共同体に魅力を感じたのではないかという精神医学者の解説を載せていた。

同日夕刊では「揺れる「方舟」の娘」の心／押し黙り親と帰宅」「母の熱い茶に抱き合う」「家族で満たされぬ」、五日も「まだ遠い一家団らん／「方舟」と接触の女性も」と女性たちの動静を伝えたが、六日には「方舟」キズナ強く／女性たち次々と「復帰」と事態は再展開した。七日には「方舟」信者数年前に自殺／千石告白 集団逃避行の原因？、九日には「かけ込み寺」だった／信者の円満帰宅望むが」と「方舟」教祖側の言い分を伝えた。

その後、「千石イエス東京へ移送」（九日夕刊）、「千石の聴取一週間は無理」（二〇日）、「千石イエスをかばう残留者」（二二日）、「千石イエスが出頭へ」（二二日夕刊）、「方舟」解散ほめかす／「平穩に暮らしたい」（二三日）と伝えたが、「千石が退院」（三一日）して「千石イエス取り調べ再開」（九月四日）も、「千石イエスを書類送検／「方舟」事件捜査を終了」（九月一〇日夕刊）となり、「イエスの方舟、不起訴」（八一年五月三〇日）で一件落着した。

若い女性たちの集団家出に始まる失跡事件は、マスコミが大きく取り上げたことにより、現代社会の宗教、家族、親子などの問題と交差することになった。

二 マスコミの報道状況

十人の若い女性の家出、彼女らが揃って入信していた宗教団体「イエスの方舟」のバラックや天幕ばりの「教会」と教祖の奇異さ、この怪しげな教祖とともに二十六人の会員が二年以上にわたって失跡していたこと、三十五ヶ所以上も各地を転々と漂流して福岡に漂着したこと、そこで娘たちがキャバレーのホステスをしながら共同生活を送っていたこと、マスコミや警察の追求によって浮上し家族と再会した娘たちが「方舟」に戻って共同生活を送ったこと、このように「イエスの方舟事件」は、マスコミに格好の報道材料を提供したのであった。

八〇年一月から八一年七月までの週刊誌・月刊誌の「イエスの方舟事件」関連記事の掲載状況を示した表一によれば、「イエスの方舟」が浮上した八〇年七月に記事が集中していたが、九月、一〇月に「事件」の論評、分析を各誌が掲載し、翌年の「方舟」不起訴後まで雑誌の関心が示されていた。

記事本数の多い順に言えば、『サンデー毎日』が三十五本と他誌を引き離し、以下『婦人公論』と『週刊サンケイ』の八本が続いていた。これら三誌の関心が高かった理由については後述したい。

そして、『週刊新潮』四本、『週刊文春』『週刊ポスト』『文藝春秋』が各三本、『週刊朝日』『週刊読売』『現代』が各二本であった。

女性向け週刊誌では、『女性自身』『週刊女性』『週刊明星』が各三本掲載していた。

週刊誌・月刊誌の「イエスの方舟事件」の取り上げ方を、見出しから探ってみよう。

表1 雑誌の関連記事本数

80年 1月	婦								
2	サ	文	週刊平凡						
3	婦 2	新	女	毎					
4	毎								
5	婦 2	毎							
6	婦	サ 4							
7	毎 15	新 2	週刊読売 2	週刊朝日 2	ポ 2	自 2			
	サ 2	女	明	女性セブン					
8	婦	毎 9	財界						
9	ポ	流動	現代	毎	文	婦	文春		
10	文春	毎	中央公論	世界	主婦と生活				
11	文春	毎	諸君						
81年 1月	毎	文	自	明	週刊現代				
2	新								
4	現代	女							
5	毎 2								
6	毎 2	明							
7	サ								

(注) 誌名の右の数字は、グラビアを含めた複数の記事の本数を示す。1本の場合は省略した。省略した誌名は以下の通り。

婦：婦人公論、サ：週刊サンケイ、文：週刊文春、新：週刊新潮、女：週刊女性、毎：
サンデー毎日、ポ：週刊ポスト、自：女性自身、明：週刊明星、文春：文藝春秋

まず、若い女性たちが消えたということ**を強調する記事が出た。**

「若い女性10人がこつ然と消えた!」「イエスの方舟」の正体」(『週刊サンケイ』二月二八日号)

「若い女性たちが消えてしまった　母親たちが悲痛な訴え！」『週刊平凡』二月二十八号）

「娘たちが消える！」「イエスの方舟」だけではない現代ニッポン「狂信の黙示録」
 (『サンデー毎日』三月一六日号)

さらに一歩進めたのが、つぎの見出しである。

「現代版神かくし? 若い女性十人が消えた
「イエスの方舟」の正体」(『週刊女性』三月
二五号)

ここまでくるとつぎは「人さらい」となる。
「攫われた娘から来た手紙」(『婦人公論』
三月号)

表2 新聞の関連記事本数

年	月	サンケイ	朝日	読売	毎日
80.	2	29(5)	1	1	1
	3	14(2)	5	0	0
	4	4(3)	0	0	0
	5	3	0	0	0
	6	10(2)	0	0	0
	7	63(12)	32(3)	33(4)	34(7)
	8	3	4	1	2
	9	5(1)	3	1	1
	10	7(1)	0	0	0
	81. 5	2(1)	1	1	1
合 計		140(27)	46(3)	37(4)	39(7)

(注) カッコ内は社会面と1面のトップ記事の本数を示す。

「私の娘も攫われてしまった」(同前)

「イエスの方舟」の正体―現代版人さらい―の中心人物は元香具師―(『週刊新潮』三月六日号)

「汝悩める親よ千石イエスを恐るなかれ 彼の国に広がる人さらい教」を知るべし(『週刊朝日』七月一八日号)

南米ガイアナで集団自殺事件をおこしたカルト教団「人民寺院」と「イエスの方舟」とを対比していたのが、つぎの二本だった。

「第二の人民寺院かキリスト教の革命か「イエスの方舟」の女性信者たち」(『週刊文春』二月二一日号)

「日本版・人民寺院事件か、千石イエスの怪」(『週刊ポスト』七月一八日号)

「イエスの方舟」の宗教の内容について解説した記事が殆どなかったことは、雑誌だけでなく新聞においても共通であった。

つぎに、新聞の報道状況について検討してみよう。

朝日、読売、毎日の三大紙と「イエスの方舟」追及キャンペーンを繰り広げたサンケイ新聞の「イエスの方舟事件」関連記事の本数を表2に示した。

八〇年二月に各紙とも第一報を掲載し、「イエスの方舟」会員一同が浮上した七月に報道が集中し、九月の千石教祖の書類送検で報道も一段落し、翌年五月の千石教祖・不起訴で終結した。

全体の本数、社会面と一面のトップ記事の本数、ともにサンケイ新聞が三大紙を圧倒していた。サンケイ新聞の

「イエスの方舟」追及キャンペーンの報道内容については、改めて検討するが、同紙の力の入れ方は全く異例であったといえよう。

また、「イエスの方舟」浮上直後の七月五日に各紙が揃って掲載した、同事件にたいする論評もまちまちであった。朝日の「天声人語」は、疑似原始共同体とでもいうべき「方舟」の「共同生活」の楽しさを指摘していた。

「魅力は何よりもその「共同生活」にあったらしい。現信者も元信者も、ひとしくその生活の楽しさを、こんな風にいう。「方舟の中では、会社や家族のいやな人間関係を忘れ、ほっとした気持ちになる」

読売の「編集手帳」は、「騒ぎのもととほくありふれた親子断絶、家庭の冷たさだ。その背後に顔をのぞかせるのは現代社会の深淵のようにも思える」といい、親たちと娘たちの言い分を紹介したあとで、こう主張した。

「宗教として余りに不完全な集団だとしても、家庭に絶望、ほかに頼るものがない人たちが心の支えを求めて集まるのを妨げることはできない。警視庁の強制捜査は鶏をさくのに牛刀を持ち出した観がある」

毎日の「余録」は、千石教祖が「妖僧ではなく、疲れ果てたおっちゃんだから団結が維持されたのかもしれない。世間や家族から切り離された閉鎖的集団。仲間同士、たがいに傷口をなめあって過ごすには、傑出した指導者はいなくてじゃまなのだろう。千石おっちゃんの口癖は「仲よくしよう」だったそうだ」といい、前日の「こんな男がナゼ」という記事に対応して、千石教祖の平凡さを強調していた。

同紙は同日に「二年余も失跡した娘たち」と題する社説も掲載したが、「方舟の責任者（おっちゃん）は自分のことを本当に思ってくれる人で、そういう人のところにいたかっただけ」という彼女たちの言葉を信ずるなら、この事件の性格も、形を変えた現代の「駆け込み寺」ではなかったか」とみて、人々の悩みに対する「温かい血のかよったカウンセリングが、キメ細かに行われる社会だったら、今回の事件が起きたかどうか」と「方舟」に好意的だった。サンケイ新聞の「サンケイ抄」は対照的であった。「ごく当たり前の『常識』に従えば、彼らはごく単純な狂信者

ループだろう。しかし常識を見失って、「方舟」を宗教団体、千石を宗教家と想ったりすると、妙な誤解が生まれてくる」

同じ日に「あまりにも奇異、方舟事件」という社説（主張）も掲載したが、「その奇怪さ、それがまかり通っている、日本の社会の病んだ部分を思わないわけにはいかない」といい、「イエスの方舟」は「宗教」であるか疑わしい。宗教だとしたら「邪宗」というものであり、「邪宗」には、まどわされてはならない」と説いた。そして、「方舟事件」は千石イエスの詐術に操られた「集団ヒステリー」的症狀といえよう」と断じ、「こうした異常が現出しない土壌を、どう築いていくか」と結んでいた。

さらに、朝日を除く三紙が掲載した、読者の投書も各紙の「イエスの方舟事件」に対する見方と対応していた。その題目を示しておこう。

サンケイ新聞

「カリスマ的宗教排せ」「千石イエス次元の低いヒトラー」「方舟事件解決立役者に敬意」「方舟事件各紙の報道のありかた」「方舟取材班の労をねぎらう」「他人事でない方舟事件」「方舟」女性に忠告したい」

読売新聞

「『方舟』事件は時代の荒廃象徴」

毎日新聞

「逮捕する必要があったのか」「報道と警察の対応に不安」

サンケイ新聞は「イエスの方舟」の会員たちを狂信的グループとみていたが、その後明らかになったことから判断すると、読売新聞の見方がもっとも正確だったように思われる。朝日、毎日両紙のいうような単なる仲良し集団ではなく、平凡なおっちゃんではなく、特別な能力をもった千石教祖を中心として固く団結した宗教集団であったといえよ

う。それは、その後二十六人が一人も欠けることもなく、現在まで共同生活を続けていることから窺われる。次節以下では、マス・メディアの「イエスの方舟事件」の報道を具体的に検討してみよう。

三 先駆けとしての『婦人公論』

「イエスの方舟」の会員たちが突然姿を消してしまい、娘の家族たちや搜索願いをうけた警察の追跡でも消息は杏として知れなかった。万策尽きはてた家族たちはある作家の紹介で、『婦人公論』に手記を発表することにした。その作家の回想によれば、

「マスコミのどの部分を刺激すれば、それが雑誌に載り、新聞が注目し、テレビが追い駆け、週刊誌が騒ぐか。同時に、警察はどのように対応するか、変貌するか」を考えて、火をつけたという（手記「イエスの方舟」事件）『文藝春秋』八〇年一〇月号）。

その後、筋書き通りマスコミが動き、国会での質疑応答、警察の搜索強化、強制捜査、「イエスの方舟」の浮上ということになり、娘たちと家族との再会は実現した。だが、再会した娘たちは再び「イエスの方舟」の共同生活に戻ってしまった。

『婦人公論』誌は、かねてから読者の手記を募集しており、行方不明になっている娘の母親の手記の掲載も自然なことであった。また、「被害者」の一方的な「事件」の捉え方も、筆者の主観があふれている「手記」では吐露可能であった。

『婦人公論』八〇年一月号に掲載された「千石イエスよ、わが娘を返せ」と題する手記には「十数名もの若い女性が一人の男のもとで共同生活をする奇怪な宗教集団に、高校在学中の娘を奪われて」と副題が添えられていた。

この手記の中では、教祖を「千石イエス」と呼んでいたが、ものごしが柔らかく猫なで声を出し、お世辞を平気で言い、聖書やキリスト教について、学問的な真面目な勉強も何もしていない、牧師でもない異様な男だった。

「イエスの方舟」の本部は背よりも高いトタン板でぐるりを囲んだプレハブの建物で屋根の上からすっぽりとシートでおおった「仕切場」のようなところだった。(その写真も載せられていた。)

「教会の刃物とき」が勧誘の手段で、何度か本部に行っているうちに、世間話をしながら悩みを聞き、相談に乗り、不思議な世界へ誘い始める。

千石という男は自分を「イエス」と呼ばせて、周囲に十数人の若い女性ばかり集めているらしい。にもかかわらず、両親が子どもに会いに行くと「ここにはいない」と言っているという。

このように「イエスの方舟」の奇怪さを強調し、さらに「娘は監禁されている」と述べた。

そして、通常の牧師、教会ならばよろこんで子どもたちを預けるといったが、

「社会から隔絶された生活を強い、あらぬことを吹き込み、親と子を対立させ、その中に入り込んで、あたかも娘を救う救世主のように見せかける詐欺師的な手口はやりきれません」と千石のやり方を批判した。

「寒い冬空の下、布団も与えられず、毛布にくるまって、外に出ることも禁止され、満足な食事も与えられずに毎日をおくっている娘たちのことを思うと、いても立ってもおられなくなる」とも書いていたが、事実とかけ離れた全く主観的な見方であったことが、後に判明した。

同誌三月号には「攫われた娘から来た手紙」が掲載された。前述の手記に対する娘の反論の手紙であった。「私が今経験している喜び以上の喜びを打ち出して来ない限りは、私が家に帰る理由はない」とあったが、母親は「また、千石に書かされた」「何故ウソばかり言うのか」と言い、何年かかって、エセ宗教者・千石やあなた方を追いつづけるつもりだと書いていた。千石教祖の顔写真も掲載されたが、眼光鋭く口ヒゲをはやした精悍な中年男のイメージ

を与えるものだった。

同じ号に「私の娘も攫われてしまった」というもう一人の母親の手記も掲載された。

千石をニセ牧師・人さらいと決めつけ、家出をそそのかし突然行方不明にさせるといった。「イエスの方舟」の異様な建物は、人間が住める状態の建物ではなく、娘は窓のないベニア張りの三畳に閉じ込められていたともいった。

「一日も早く布団や食料、太陽、自由をこの娘たちに与えなければ、助け出さなければ、と必死に思います。」

そして、若い娘ばかりを巧妙な手口で攫った千石剛賢を永い間、放置したことが、多くの被害者を出した原因だといいった。

同誌四月号には母親の手記第三弾「15年探した娘は方舟に」が掲載された。

「千石さんは、自分でイエスと称し、「親もきょうだいも捨てて、ぼくの所へ来い」と教えていた。」「千石さんのところへ入った人は「家に帰らない」という」「よっぽど千石さんのところには、いいところがあるのでしょいか」「他人の娘を養女にするという千石さんのやり方も、イエスの方舟」から逃げ出したくても、子供にしておけば継ぎとめておけると思っているのではないか」などと書いていた。

五月号には「魔の手から逃れて」が掲載された。妹が家出している姉の手記であった。

「方舟」から逃げ出す人がいないのは不思議なことだ。責任者・千石剛賢は魅力的な人だと思うが、彼のために多くの人たちが不幸になっていることを考えると、どこかで人を欺いているのではないか。なぜ、みんなを連れて姿を消すのか、疑問に思うと書いていた。

同じ号には、「千石イエスの声」として、「悪魔の思いの最たる行為」という説教のテープが再現されていた。

その後、「イエスの方舟」の幹部だったという男性の証言が、続けて掲載された。「元副責任者としての告白」（六月号）「イエス遁走の内部事情」（八月号）。そして、「15年ぶりの母娘の対決」（九月号）で連載は終了した。

母親たちの手記は、「事件」についての「被害者」の主観的な記述であり、憶測で書いた部分もあったので、事実と食い違っている部分も少なくなかったが、娘たちを誘拐して姿を消した、奇怪な宗教集団と教祖のことを広く天下に周知させて、行方不明の娘たちを探す手がかりが見つければいいという目的は果たしたといえよう。同誌四月号の「編集後記」はこう書いていた。

「本誌が先月号で探索方をお願いした結果、千石イエス事件が、ＴＶ、新聞はもとより国会でも問題になり、方舟の行方を追うことになったことは、当然のことと思います。」

だが、「千石イエス」と名のる怪しげな教祖に率られ、若い娘ばかりを誘拐、監禁、失跡する「人さらい教団」という「イエスの方舟」像も作られたのであった。

四 サンケイ新聞の「邪教」キャンペーン

「イエスの方舟」の教祖らとともに失跡してしまった娘の母親の手記が『婦人公論』八〇年一月号に掲載されたが、これに基づいて報道を試みる新聞はすぐには現われなかった。新聞の事件報道の原則は中立公平、客観報道である。事件の当事者双方の言い分をきき、事実の裏付けがない限り、記事にはできない。あるいは、官庁、大企業、警察、消防など「権威」のある情報源の発表した情報でなくてはならない。新聞がある事件について報道した結果、その当事者から名誉毀損で訴えられたとしても、真実であるか、真実と信じるについて相当の理由があると証明されれば、新聞は免責されるからである。被害者の母親と称する人の主観的な言い分だけでは、「イエスの方舟」側の言い分もきかなくては、記事はつくれなかった。その上、「方舟」一同は潜行していたので、取材は不可能だった。また、宗教が関係してくると、「信教の自由」を妨害したといわれかねなかった。そこで、読売新聞は国会で質疑応答が行わ

れたことに関連して第一報を出した(二月二二日)。朝日新聞(二六日夕刊)と毎日新聞(二八日)は、警視庁が全国の警察本部に捜索を手配したのを受けてであった。

ところが、サンケイ新聞だけはこの事件に特別な関心を示した。「イエスの方舟事件取材班」を編成して、二月七日から「イエスの方舟」追跡キャンペーンを開始した。二月九日から七月四日まで「イエスの方舟」を追う」と題する連載記事を三十四本掲載した。そのうち二月二三日から六月三〇日までの一九本の記事には「現代の神かくし」と副題が付けられていた。また、六月二八日から七月四日までさらに、「再検証」として六本、一〇月一四日から二〇日まで「改めて問う「イエスの方舟」」七本を掲載した。それに、読者に怪しげなイメージを与えた、「千石イエス」の顔写真も二月八日から七月二二日まで二十三回も掲載した。

以下、主要な関連記事の見出しによって、同紙の「イエスの方舟事件」の報道を追いかけてみよう。

二月七日「若い女性10人“失跡”／「イエスの方舟」に入信／ナゾの教祖と流浪か」

「わが娘を返して下さい／全国を捜し続けて九三〇日／「千石イエスよ、なぜ逃げる」

「こうして“神隠し”に／教室までつまとう」

二月八日「なぜ続く逃避行／岡山で異常な集団生活を最後に／仕事せず「洋裁」の看板」

二月一〇日「箱に寝泊り、小型バスで“儀式”／奇妙な雑居／これが「イエスの方舟」の実態」

二月一五日「親は悪魔だ」と説く／日曜学校の“教義”／失跡15年、老母の髪も白く」

二月一七日「突然除籍「養女に」／「まるで人さらい」／残された母はひとり泣く」

二月一九日「奇怪な千石ファミリー／離婚後も同居／「幹部」の子らを養女に」

二月二三日「睡眠かける達者な弁舌／妖術師／不安定な心に乗じ」

二月二四日「公共施設で“つる”／落とし穴／架空団体や偽名使い」

三月一日「巧妙に法を目ごまかす／千石六法／「信教の自由」逆手に」

三月二日「失跡女性3人から手紙／「逃げ回っていない」／背後に教祖介在？」

三月三日「警視總監にまで「直訴」／巧妙だったレター戦術／捜索の断念狙う」

三月八日「10項目の「無理難題」／ノーマットで30分／全番組止めて放映せよ」

三月九日「奇怪な「千石・教義」／「聖書をインチキ解釈」／随所に危険な思想」

四月二日「イエスの方舟犯罪の疑い／行方捜査を全国に指示／「宗教」といえぬ」

四月二八日「育ての親から養女ひきさく／教祖、強引な実子「奪回」／18歳で接近「洗脳」

六月二五日「追手かわし巧妙な逃避行／生活のこん跡消し／捜査逃れ？の「心筋梗塞」

六月二七日「イエス「どたん場作戦」週刊誌とインタビュー／そらぞらしい弁解」

「再検証」の六本は以下の通りであった。

「「誘かい犯より酷い」／かけ落ちとウソつき／「非行を救った」なんて……」

「少女の心ゆさぶる巧妙な「手口」／ウソ、詐術で引込む／家出偽装の「神隠し」

「まやかして集団失跡／娘たちを隠し切れず／「暴動だ」捜す親に責任転嫁」

「これが執拗な誘惑の実態／集会のたびに送迎車／怠学や親不幸説く」

「親友のキズナにつけ込み／誘った後、逃げ回る」

「「献金」で逃走資金作り／自宅売った150万円も提供／刃物ときは信者勧誘のため」

七月三日にはキャンペーン記事でなく、社会面のトップとしてつぎの記事が報じられた。

「千石イエスらに逮捕状／幹部3人にも／福岡で女性たちをホステスに」

同日夕刊では、一面トップ記事が、

「千石イエス、今夜にも逮捕／実娘、幹部ら4人も手配／女性の保護に全力／福岡 先月まで隠れ住む」であり、社会面トップが次の記事だった。

「『虚飾の教祖』千石イエス／女性たちの『労働』にアグラ／実業家と称し豪遊／高級背広で札ビラ切る」七月四日は一面も社会面も「イエスの方舟事件」がトップ記事であり、大々的に取り上げられていた。

「失跡女性を全員保護／熱海の寮に隠れ住む／千石イエスが入院／逮捕直前に狭心症発作」（一面）

「娘は返ってきた！／親子の新しい生活めざす家族／「もう離しません」（社会面）
社会面には次のような記事もあった。

「千石、偽善と怠惰な半生／テキ屋で鍛えた話術／牧師あきらめ「方舟」創立」

同日夕刊では、娘と肉親との対面を伝えた。

「抱き合う母や娘も：／「よく帰ってきたね」／説得に反発みせる女性も」

七月五日には、「こんなことが許されていいはずがない／社会の盲点、巧妙につく／親の悲嘆、耳かさず」という記事が、「千石イエス、けさにも本格取調べ／病状ほぼ回復、自ら出頭の意思」「水いらずで寿司／「15年をムダにしない」と並んで掲げられていた。

以後、「東京移送を見送り／血圧高く苦痛訴え」（五日夕刊）、「『発見』直前、1人に15万円／「小遣い」にと分ける」（六日）、「東京移送当分見合せ／残留組からも聴取へ」（七日）、「『方舟』解体を説得／警視庁残留11人に出头求める」（八日）、「千石イエスら証拠隠滅工作／手入れ直前に消す」「千石イエスけさ東京移送」（九日）と事実の報道を続けただけでなく、「千石、夜中に歯ぎしり／重症のはずがタバコ／残留組は『再浮上』準備中？」（二四日）、「これらが千石流の誘い方／イエスの方舟手紙数十通を入手／「あなたはダイヤ」／「強引な勧誘の証明だ」（一五日）と批判的報道も行った。

そして、「千石イエス取り調べ／「方舟」全容解明急ぐ」(二三日)、「千石イエス矛盾だらけの供述／「わたしも会員の一人」／「入院中で知らなかった」(二三日)、「千石イエスが退院／警視庁、近く調べ再開」(三一日)、「本格取調べ開始／「方舟」の全容解明へ」(八月六日)、「イエスの方舟」捜査に幕／全容不明のまま」(九月一〇日)で決着した。警察としては、二年以上もの間迷走を続けていた集団を発見できたので一応の成果はあったとしていたが、同紙は「方舟」問題の解決にはまだまだ時間がかかるとみていたし、翌日には「千石の素顔をみた！／警察や親を欺し／出頭拒否しては「デイト」と千石批判を繰り返した。

そして、一〇月には「改めて問う「イエスの方舟」」を七本連載し、反社会的な問題を改めて問うた。その見出しは以下の通りだった。

「千石は疑問に答えよ／娘たちすっかり変貌／甘え、身勝手、自己主張」

「誘いの手」は千石から／装った「かけ込み寺」／「自然に集まった」は奇弁」

「動かぬ虚言の証明」／両親や警察をかく乱」

「娘隠し」のウソ／「死ぬと言われて」／その場、その場のいい逃れ」

「親の娘捜しを「暴動」とこじつけ」／「住居侵入」と脅す／警察を手玉に異常な脱出行」

「おっちゃん」はまやかし／絶対的服従の教義／「人間の考えは「悪魔意識」」

「どうとる社会的責任／ザンゲ悪用し「統制」／布教、求道が目的ではない」

八一年五月二九日夕刊には「イエスの方舟事件捜査ビリオド」という最後の関連記事が載った。「千石イエスへの告訴取下げ」と並んで、しかもそれより大きく「家族とは親子とは何なのか！／「方舟」へＵターンの娘たち／身勝手な行動」と報じた。それは「方舟」の娘たちが千石教祖の「洗脳状態」から一日も早く「社会復帰」するのを待ちたいとしていた。

サンケイ新聞の「イエスの方舟事件」報道は、関連記事の本数、その取り上げ方、ともに他紙を引き離していた。取材班を編成してまで「方舟」を追い続けた理由については、七月五日の「こんなことが許されていいはずがない」に書かれている。まず、娘さんたちをいったんは家族の手に戻してあげたい、という思いから「イエスの方舟」を追ったが、取材を進めていくと、「いまの世の中でこんなことがあっていいはずがない、明らかに「宗教をかたった犯罪」であり、社会問題として中心人物を追及すべきだと思った」し、「さらに具体的に千石が「方舟」のなかに取りこんでいく手口をひとつひとつ追っていくと、常識とかけ離れたいくつもの疑問が浮かび上がってきた」のであった。奇怪な失跡事件を放置しておけなかったし、捜査が一段落しても、「改めて問う」のような疑問が残っていた。

ただ、事件報道の原則からみると、サンケイ新聞の「イエスの方舟事件」の報道には問題点があった。ニュースの情報源が、家出した娘たちの家族と「イエスの方舟」を捜査していた警察とに偏り、「イエスの方舟」側の言い分が報じられなかったことである。「イエスの方舟」一行は失跡中で、直接取材できなかったのは、サンケイも他紙も共通していた。他紙は「イエスの方舟」報道は控えていたが、サンケイは市民の常識的正義感覚に基づいて、「イエスの方舟」を追跡する必要を認め、彼らに批判的な「被害者」の言い分を積極的に取り上げ、「邪教」キャンペーンを展開した。その記事には、「神隠し」「人さらい」「妖術師」「洗脳」「ウソ」「まやかし」といった、おどろおどろしい言葉がおどりと、「イエスの方舟」には邪教イメージが定着した。

報道論的にいえば、サンケイ新聞の報道は、『婦人公論』に手記という形で発表された、「事件」についての主観的な情報を、ニュースという客観的な情報に変換したのであった。そして、「イエスの方舟」の会員たちと「方舟」に参加するために家出した娘たちと、娘たちを奪回しようとした家族たちとの間の「騒動」が、社会的な意味をもつ「事件」へと変えられたのであった。

その結果、「イエスの方舟」は邪教教団として、社会の「常識」の厳しい批判の眼にさらされることになった。聖

書をインチキ解釈している教祖とバラックづくりの教会。彼らがこそ逃げ回っているのは宗教として何かやましいところがあるからではないか。そうでなければ堂々と世間に姿を現わせばいいのではないか。また、怪しげな教祖とともに大勢の若い女性たちが行方をくらましていること自体がスキャンダルとみられたし、彼女たちがキャバレーのホステス勤めをしながら共同生活を送っていたとあっては、宗教に名をかりた教祖の専制ではないかともみられた。

五 『サンデー毎日』の「方舟」擁護報道

『婦人公論』とサンケイ新聞の報道にリードされた、マス・メディアの「イエスの方舟事件」の報道が「邪教」イメージ一色になったかといえば、そうではなかった。「イエスの方舟」側の言い分を積極的に取り上げるメディアが出てきたからである。それは、『サンデー毎日』であった。

同誌の「イエスの方舟事件」に関する最初の記事の見出しは、「娘たちが消える！」であり、つぎのように書いていた（三月一六日号）。

「宗教的なカラをつけているが、よく見ると、どうも俗っぽい、あやしげな一人の男が浮かびあがってくる。」

「カリスマというには、余りにもインチキ臭い「千石イエス」。姿を消しているのは、自身のカリスマ性に全く自信が持てないからにちがいない。」

同誌も最初は他のメディアと同じように「消える宗教」「イエスの方舟」に批判的であった。ところが、「イエスの方舟」会員一同から報道各社に届いた、自分たちの行動についての弁明の手紙を各社は無視したが、『サンデー毎日』は「私たちは決して集団自殺などしません」としてその要旨を紹介した（四月二〇日号）。そのコメントはつぎのようしめくくられていた。

「洪水がやみ、ハトが陸地を見つけて飛び去るように、方舟がいつかこの岸について、うら若き娘らが笑顔を浮かべて立ち現れる『ある晴れた日』が一日も早く来らんことを祈る。」

同誌は五月二五日号でも会員たちから来た手紙を紹介した。このような同誌の対応が「方舟」の会員たちを動かしただようである。警察の捜査網も迫りつつあった。「方舟」側は、自分たちの行動を弁明する場として同誌を選択した。千石教祖は編集長の独占インタビューに応じ、会員一同は福岡のマンションから同誌の紹介によって、製本会社の熱海の寮に移動した。警視庁へ自分たちから乗り込もうと企図していたが、いつ出るか意見が対立していたとき、千石教祖が高血圧と狭心症で倒れて緊急入院し、会員一同が姿を現わしたのであった。同誌は、集団逃避行の最終段階で二〇日間、「イエスの方舟」に同乗漂流し、取材を続けた。そして、「スクープ」記事を次々と掲載した。それらは、『婦人公論』やサンケイ新聞の報じた「イエスの方舟」像とはかけ離れたものであった。

七月一三日号の「千石イエス」独占会見」では、「自分がイエスだと言ったわけがない」、そして「問題解決」のために出てきた、「親は悪魔」というはずがない、各人の人格形成にお役に立ちたい、女の子は私を『おっちゃん』と呼ぶ、といった千石剛賢氏のことばが紹介されていた。

同誌の「イエスの方舟」に対する立場はつぎのように好意的にコメントされていた。

「本誌は、一つの予感をもっていた。彼らが、もし伝えられるような犯罪集団ではなく、またいかがわしい邪教集団でもなければ、必ず彼らの方からすすんで白日の下へ出てくるのではないか、という予感である。」

「この「イエスの方舟」事件の悲劇は、外見的な異端、行動上の異端、思想上の異端が常識的社會の中で何やらあやしげなものとしてとらえられ、その結果『魔女狩り』として追いつめられ、姿を隠すことによって、自らますますその異端的イメージをふくらまされていった、その点にあるような気がする。」

同じ号に「野の『説教者』その実像 バイブルと語らいの中から魂の結合を図る不思議な『手作り教団』の司祭」

も掲載され、一部マスコミの「誘拐教団」という非難は一笑に付すべき妄想であり、「千石イエス」を自称するといわれる男の、おぞましいイメージは崩れ去った、仮病を使うペテン師という悪評も不当な中傷であったといい、つぎのように結んでいた。

「イエスの方舟」という小さな小さな共同体は、中核となる男のペルソナを通して愛と希望を感じしあう至福の段階にあるのではないか。彼らが、「私たちの宗教ではない」というとき、それはすぐれて「宗教」であった。」

同誌の千石教祖インタビューは、「水商売……娘たちは変わった」「方舟」の愛と性」と題して三週連続して掲載された。また、「家出女性」七人の告白「私たちはなぜ「方舟」に乗ったか」も七月二〇日号に掲載された。同じ号に「娘たちはなぜキャバレーに！」、翌週号に「再び始まった「親子の愛憎」」「おっちゃん！裏切るのか！」どたん場で娘たちは叫んだ 熱海最後の72時間」という記事が掲載された。

その後、一月一六日号に「イエスの方舟」浮上四カ月 家に戻った娘たちはいま」と六人の手記を掲載したが、他面では『サンデー毎日』の「イエスの方舟事件」の報道は、彼らを擁護する記事の連続であった。「警視総監に問う！「イエスの方舟」のどこが犯罪か／親子のモラルに介入した魔女狩りだった」（八月三日号）、「警察に「方舟解散」を流された「おっちゃん」の真意」（八月一〇日号）、「私も「方舟」の教祖になりかかった 孤独で悩み多い娘たちに囲まれて」（八月一七日号）、「あなたは孤独地獄のお助けじいさんや」（八月二四日号）、「イエスの方舟」公開討論」（八月三二日号）、「イエスの方舟」幻想捜査の終結「邪教」のイメージづくりに失敗？」（九月一八日号）、「イエスの方舟」を犯罪に仕立てた警察・家族・マスコミの「共同謀議」メモ」（一〇月一九日号）。

八一年六月二二日号に掲載された最後の記事も、「加害者は人間の原罪だった」という千石教祖の手記と並んで「イエスの方舟」いま自由への出帆 不起訴 明白になった警視庁の敗北」であり、こう書いていた。

「『現代の神かくし』『人さらい教団』と非難・中傷したサンケイ新聞などのマスコミと「犯罪あり」と見込み捜

査して逮捕状まで用意した監視庁は、全面的に敗北した。」

『サンデー毎日』の報道は、千石教祖以下の「方舟」の会員一同（家出した娘たちも含めて）の言い分を大々的に取り上げ、「被害者」と自称する娘たちの家族、警察、それにサンケイ新聞の「事件」についての見方を全面的に否定し、これらの勢力が「魔女狩り」を行ったと批判した。

その風変りな教祖と建物、ユニークな聖書解釈、共同生活、集団逃避行、「被害者」の訴え、マス・メディアの「邪教」キャンペーン、などによって世間から誤解され、迫害され、歪んだイメージをもたれていた「イエスの方舟」側に、弁明の機会を提供し、その誤ったイメージを修正したと同誌は考えていたかもしれない。だが、サンケイ新聞の「イエスの方舟事件」の報道で言及した、当事者双方の言い分を聞くという事件報道の原則からいえば、『サンデー毎日』の「イエスの方舟事件」の報道も「方舟」側に肩入れしすぎたことは否定できない。

六 むすびにかえて

『婦人公論』が口火を切り、サンケイ新聞が「邪教」キャンペーンを繰り広げ、それに対して『サンデー毎日』が「魔女狩り」と反論したのが、「イエスの方舟事件」の報道の大筋であった。

当事者の一方の「イエスの方舟」一行が集団失跡していたため、マス・メディアは直接取材できなかった。そこで、「イエスの方舟事件」の報道は、最初から「被害者」の見方に偏り、「方舟」の宗教生活の内実よりも外形の異様さが強調され、「方舟」は「神隠し」「人さらい」をする「邪教」とされた。「事件」の最終段階になって、『サンデー毎日』の「イエスの方舟」擁護報道もあったが、『サンデー毎日』がムリヤリ「ヒーロー」に仕立てあげた千石イエスと女性者の実像（『週刊文春』七月一七日号）のような批判的な意見が強かった。はては「神か悪魔か「千石イエス」で

対立する新聞」(『週刊新潮』七月一〇日号)、「イエスの方舟」事件とマスコミの報道」(『サンデー毎日』七月二七日号)のように「サンケイ」と「毎日」の「宗教戦争」と揶揄される始末であった。それは、その後も、サンケイが、「千石イエス報道のウソを暴く」(『現代』九月号)、「改めて問う「イエスの方舟」」(『サンケイ新聞』一〇月連載)、「不起訴になっても解けない「イエスの方舟」の真相」(『週刊サンケイ』八一年七月二日号)と続け、「サンデー毎日」も前述のように、「イエスの方舟」を犯罪に仕立てた警察・家族・マスコミの「共同謀議」メモ」(『イエスの方舟』いま自由への出帆)と応戦していた。

最後に、「サンデー毎日」は、「事件」は幻影であった(八一年六月二一日号)と総括していたが、『週刊サンケイ』はこう書いていた。「千石イエスが娘たちを隠し、親を欺いている事実だけは、納得がいけない問題だった。」「千石イエスが目指したものは、自らは座して暮らせる『千石王国』ではなかったのか。」(七月二日号)

結局、「イエスの方舟事件」とは何だったのかという問題になる。

「イエスの方舟」は、宗教法人の認可を受けていないから、宗教ではないという意見もあったが、教祖、教義、教典をもち、信仰生活を送っていたところからみると、「イエスの方舟」は宗教集団であった。そこに若い娘たちが入信し、家から出て「方舟」の共同生活に加わった。娘たちの家族は家に連れ戻そうとしたが、娘たちは家に帰りたくなかった。家族の実力行使に耐えきれなくなった「方舟」一行は、集団失跡した。マスコミ、警察の介入によって、「方舟」は浮上し、娘たちも帰宅したが、その後、「方舟」に再び結集し、現在まで共同生活を送っているのである。

両親や家族よりも自分のことを理解してくれる教祖や仲間たちと一緒に生活したいという娘たちと連れ戻そうとした家族との「騒動」が、「イエスの方舟」という新興宗教がらみで「事件」化したために、「イエスの方舟」は「神隠し」「人さらい」をする「邪教」とされたのである。「イエスの方舟」が潜行中で反論しなかったことも事態を悪化させた。さらにマスコミと警察の介入によって、「事件」はより複雑化し、社会問題化されたのであった。

マス・メディアの大々的な報道によって、結果として、家出していた娘たちの消息は確認されたが、そもそも「イエスの方舟事件」は、大々的な報道に値する事件だったのかという反省もきかれた。

「『方舟の娘たち』が抱えている問題の根は日本の家庭全体が抱えている問題とつながっているといえるが、とりあえずは個々の問題であり、『家族争議』である。……自由意志で千石のもとにいたいという娘たちの行動はどうすることもできない。……大新聞がなりふりかまわず『方舟』大論争をしてみても、この親子断絶の解決にはなりそうもない。まるで、大新聞が『方舟の娘たち』とその親の対立にふりまわされた感すらある。」(『週刊ポスト』七月二十五日号)

当の大新聞自身も、社外の寄稿者につきのように語らせていた。

「わたしには、イエスの方舟なるグループが、なぜあれほどマスコミのテーマとなったのかがふしぎである。

ある特定の宗教グループ、思想、信条をひとしくするグループが、共同生活をいとなむのは、……さほどふしぎなことではない。宗教界ではごくあたり前のことといえるだろう。」(サンケイ新聞、七月二二日「正論」)

「なぜこんな、他人にはあまり関係のないある少数の人々の家庭内のトラブルにすぎないようなことが、こうも大々的に連日報道されるのかわからない。……こういう事件を、現代における家庭の崩壊の現れとか、人間関係の希薄化が生んだものだとかいって反省の資料にするのも結構だが、この事件の騒がれ方というのは、もっとそれ以前の、どこかにちょっと笑いののできるようなヘンな人間はいないかな、という気分が、一群の弱い人々に集中したものでしかなかったように思われる。」(朝日新聞、七月二三日「私の紙面批評」)

「イエスの方舟事件」の真相は、今だに明らかになっていない。だが、それは、「事件」の当事者以外、知る必要のないことだったのかもしれない。日本では、毎年、何千人もの人々が家出している。十人の若い女性の家出先が、「イエスの方舟」という新興宗教でなかったとしたら、マスコミも警察もそして世間の人々も大きな関心を示すこと

はなかったのではないだろうか。

『サンデー毎日』は、「事件は幻影であつた」といい、他のマス・メディアや警察の「魔女狩り」を批判していた。日本の新聞は、桃太郎気取りで、感情的、情緒的な「鬼退治」や「魔女狩り」を行っているという批判もきかれるので、その一例だったとも考えられる。

だが、一つ一つを取り上げれば大したことのない事実が大きな事件になってしまふ、この幻想の自己肥大と「魔女狩り」とは、マスコミのニュースのメカニズムから生じたものでもあつた。

ニュースの「新らしさ」には、速報性と奇異性という二つの意味がある。「イエスの方舟事件」は、奇異性という点で、ニュース価値が高かつた。若い女性たちが親の説得をふり切つて中年過ぎの男と漂流の旅を続けている。定住社会の常識は「非定住」というアノマラスな要素に対して非寛容であり、この漂流は定住社会の人々の不安感を高めた。マスコミは「不安を助長すると考えられる」「有徴」の記号からなる現実を血祭りにあげて、悪魔祓いの儀式を執行する筋骨き」として、素朴な民俗的想像力を刺激する「物語」をつくり上げた。それは、「聖なる怪物」型の神話であつた、と山口昌男氏は分析している。

そして、それは、「奇異なるものを見て、自らの存在感を内から外から脅かす力が何であるかを知り、あわよくば、この怪物が退治されるのを見ることによって安堵の胸を撫で降ろしたいという見世物に対する読者の期待を満たした」(山口昌男「イエスの方舟」の記号論『世界』八〇年一〇月号)のであつた。

結局、マスコミの報道が作り上げた「イエスの方舟」の「邪教」イメージは、読者の欲求の投影されたものでもあつたといえよう。

参考文献

芹沢俊介「ヘイエスの方舟」の現象学』『家族の現象論』筑摩書房、一九八一年

芹沢俊介『イエスの方舟』論』春秋社、一九八五年

玉木 明「無署名性言語の現象論(二)」『ニュース報道の言語論』洋泉社、一九九六年

千石剛賢『父とは誰か、母とは誰か』春秋社、一九八六年

サンデー毎日編集部編『イエスの方舟・同乗漂流』毎日新聞社、一九八〇年

朝倉喬司・山崎 哲「イエスの方舟に乗って漂流した「非家族」『犯罪の向う側へ』洋泉社、一九八五年

生田正輝『新聞を斬る』サンケイ出版、一九七八年

新聞、雑誌の関連記事については省略した。

なお、「イエスの方舟事件」に基づいた、以下の創作は、特に参考にしなかった。

山崎 哲『うお伝説・漂流家族』深夜叢書社、一九八二年

大原富枝『アブラハムの幕舎』(大原富枝全集第四巻)小沢書店、一九九五年

